

# आयूस: あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館  
京都文教短期大学図書館 / 京都府宇治市槇島町千足80

## ★京都文教宇治キャンパスと図書館情報誌“あーゆす”－新しい門出★

京都文教大学図書館長 森 俊 夫  
京都文教短期大学図書館長 照 屋 敏 勝

図書館情報誌“あーゆす”は、1999年秋の創刊以来、京都文教短期大学図書館の刊行物として、この宇治キャンパスの学生、教職員に親しまれてきました。

その“あーゆす”が、この18号からは大学院・大学図書館と短期大学図書館でスクラムを組んで新たに企画刊行されることになりました。私たち、

このキャンパスで学び研究するすべての学生、教職員がこのキャンパスにある大学院、大学、短期大学、いずれの図書館とも以前にも増して長く親しく利用できますよう、より充実した図書館や図書に関する情報を提供していきたいと考えています。皆様のより一層の応援と活用をよろしく願います。

## 〰〰〰〰 “芸術”と“アート” 〰〰〰〰

現代社会学科・教授(グラフィック・アート) 森 俊 夫

最近、“アート”という言葉をよく耳にする。“芸術”といえばなんとなく崇高なもので自分たちの日常生活から遠い存在のものというイメージを持っている人が多いのではなかろうか。それに比べて“アート”はなんとなく軽い。日本で“芸術”という言葉に替わって“アート”という言葉が特に頻繁に使われるようになったのは1990年代に入ってからだと思われる。今日ではジュエリーアート、ネイルアートなど何か洗練されたイメージを持たせたい時に、それらがさもアートのジャンルに入るかのように使われる。また、活力を失った都市の再開発を目的とした“アートによる町おこし”、“アートによる商店街の再生”から福祉分野における“アートの癒し効果”など“アート”を使った試みがさまざまな形で行われている。なぜ

“芸術”でなくて“アート”なのだろうか。“芸術”はもともと“アート(art)”の訳語であった。“芸術”、“美術”、そして“音楽”などの言葉は明治維新以降の西洋化の過程で出来上がったものだという。そのあたりの事情は、近年詳しく研究されている。アートと芸術に関する言葉の由来が詳しく研究されるようになった理由として、現在が明治期のはじめに似た社会の大きな転換期に差し掛かっていることが考えられる。そのあたりに興味のある方には、以下の書物をお勧めしたい。古きをたずねて新しきを知るよい機会となるかもしれない。佐藤道信『<日本美術誕生>近代日本の「ことば」と戦略』講談社選書メチエ92  
北澤憲昭『眼の神殿－「美術」受容史ノート』美術出版社

## ※...※... ことばの力 ...※...※

児童教育学科・教授(幼児教育学) 照屋敏勝

ことばは力であり、エネルギーである。古代人もことばを言霊ことだまと考えていた。つまり、ことばには霊力や魂が宿っていると考えていた。ことばは心的エネルギーや魂の具現化したものである。

ことばには4つの大きな働きがある。

1つは、伝達・コミュニケーション機能である。

2つは、思考・認識機能である。人間はことばを使って思考したり、認識したりする。

3つは、行動調整機能である。人間はことばによって自他の行動をコントロールするようになる。

4つは、創造機能である。文学作品の創作にはことばは不可欠である。ことばは文化創造の源泉である。

ことばは、そのほかにも命名機能や癒し機能や支持機能などいくつかの機能をもっている。

特に、個々人がもっている「好きな言葉」はその人の生活や人生において大きな意味や力をもっている。私にもそういうことばがいくつかある。

1つは、道元禅師どうげんぜんじの「切せつに思ふことは必ず遠とくなるなり」ということばである。『正法眼蔵随聞記』の中に出てくることばであるが、最初に会ったときとても感動した。道元禅師の意志力と内面の強さを感じた。

2つは、「大事の思案は軽くすべし」ということばである。これは佐賀藩の鍋島家の家訓の一つである。以前に『家訓』という本の中で読んで記憶に残っていたが、意味をもつようになったのは人生の大きな決断をしたときである。勤務していた沖縄の大学をやめて仏教を学ぶために家族で京都に移ったときである。このことばが決断を支え

た。

3つは、ヴィクトール・フランクル(精神科医)の「生理的に下り坂になったとき、人生はようやく上り坂となる」ということばである。フランクルはユダヤ人としてアウシュビッツでの過酷な体験をした人であり、その体験を下に書かれた『夜と霧』の著者である。私が新しい旅立ちをしたのは40代の後半であるが、そのころ、人生がおもしろくなってきたなと強く感じた。

4つは、スイスの哲学者アミエルのことばである。「心が変われば／態度が変わる 態度が変われば／習慣が変わる 習慣が変われば／人格が変わる 人格が変われば／人生が変わる」心が変われば人生が変わるということである。

『アミエルの日記』(全8冊、岩波文庫)は現在絶版になっているので、東京神田の古本屋街を探し回って見つけることができた。読んでみると、「日記」という名の哲学書である。

5つは、言語哲学者ウィトゲンシュタインの「私の言語の限界が、私の世界の限界である」ということばである。20数年前、あるシンポジウムで、このことばに出会ったとき強いインパクトをうけた。ことばが、その人の世界を決定するのである。

6つは、永六輔のことばである。「生きているということは／誰かに借りをつくること 生きていくということは／誰かに借りをかえすこと 誰かに借りたら／誰かに返そう 誰かにそうしてもらったように／誰かにそうしてあげよう」

永氏はお寺の出身なので、このメッセージにも仏教的な生き方が反映されている。世の中は「おたがいさま」であり、「おかげさま」である。

## ❖❖❖❖❖ 夢に向かうこと 自分と闘うこと ❖❖❖❖❖

児童教育学科・講師(学校カウンセリング) 今野 芳子

「あきらめなければ夢はかなう」 今回のマラソンにこのメッセージを伝えなかった。これは平成20年3月9日名古屋国際女子マラソン出場の高橋尚子選手のことばであった。結果は自己最悪の27位であった。

何度かの不運を乗り越え今回出場した高橋選手に沿道の人たちは大きな声援を送った。きっと高橋選手がオリンピック出場の切符をにぎるであろう姿を夢みていたに違いない。シドニー五輪金メダル、翌年ベルリンマラソンでは女子で初めて世界最高を記録、世界で一番という気持ちが満たされる経験をして以後の自分との闘い、、、、失速してアテネ五輪代表を逃し、小出監督と決別し、今回の北京五輪は最後の挑戦であった。しかし先頭集団からはずれていく。テレビカメラはサングラスをかけうつむき加減に走る高橋選手の姿をごくたまに写しだす。

黙々と走る高橋選手の胸中はどうであったであろう。家族や支えてくれたチーム、後輩からの大きな期待、様々なハンディを乗り越えテーマを持って臨んだマラソンであるのに、ずるずる後退せざるを得なかった自分自身。いったい何が起こったのか、そしてどうしたいのか、、、本人しか知りえない、得体の知れないモンスター(怪物)が胸の中を去来していたのではなかったか、。。

しかし翌朝の新聞報道はさわやかだった。高橋選手がゴールした後サングラスをはずし満員のメインスタンドとトラックに向かって一礼する写真があった。42キロを走りきったこと、不調に陥りながら、あきらめちゃだめだ、と何十回何百

回何千回繰り返しかえし出場したこと。「残念だけれど結果を受け止めないといけない」、「まだやりたいことがあるから走り続けたい」と言いきったこと。強靱な人である。自分の中の得体のしれないモンスターとどう闘ったのだろうか、。。。「私からメッセージを伝えられなかったけれど、沿道のみんなの声援からパワーをもらった」、この言葉からうかがえる気もする。金メダリストのQちゃん、世界で一番を目指したQちゃんその人が、自分の夢と自分と闘い、夢が破れても大人の女性として発言している姿に感動した。

その世界で一流になった人には誰をも惹きつける不思議なものがある。文学 美術 音楽 映画 スポーツ 学術しかり。なぜ惹きよせられるのか、。。それは一流となるまでのプロセスに必ず紆余曲折があり、スランプや失敗に落ち込みそこから、また這い上がってきた体験が、人格の器の大きさや暖かさになり、作品や演技やプレーや発言、叙述にかもし出されるからではなかろうか。だから、読む人 聞く人 見る人 触れる人に夢を生き、自分と闘うエネルギーを与えるのではないだろうか。

私にとって「本」との出会いは、生きていく夢とエネルギーとの出会いであると言ええる。「生きている限り夢に向かいたい。夢に向かっているのもそれは自分との闘い。自分との闘いに負けなければ、たとえ夢が叶わなくとも、後悔しなくてすむじゃない」『フジ子・ヘミングの「魂のことば」』(清流出版)の一節が今の私の生きるエネルギー源になっている。

## 📖📖📖 私のすすめる3冊 📖📖📖

児童教育学科・准教授（器楽・音楽教育） 富田 英子

### 1. 『子どもの眼の高さで歌おう』

北村智恵著／芸術現代社

ピアノ教師としての10年間のレッスン風景とともに、「子ども」や「社会」「音楽教育」について綴られた実践記録である。子どもの眼の高さで子どもたちと真正面から向き合い、一人一人の個性を大切にしながら、関心や感動を探りながら心を通わせていく著者の姿勢には畏敬の念を感じずにはいられない。子どもの感性のおもしろさ、素晴らしさとともに、我々大人も失わずにいたいと改めて実感することができる。

### 2. 『あたりまえだけど、とても大切なことー子どものためのルールブック』

ロン・クラーク著；亀井よし子訳／草思社

子どものための、社会生活における基本ルールが簡潔にわかりやすく示された本である。

小学校教師である著者が子どもたちに教えるという50のルールを、ユーモラスで感動的なエピソードを交えて紹介している。「あたりまえのこと」ばかりであるが、私たちはそれらが実行できているだろうか、子どもたちにきちんと教えているだろうか、大切なことを見落としてきたのではないだろうか、と考えさせられる。子どもにも大人にも読んでもらいたい一冊である。

### 3. 『学生が輝くとき』

清水真砂子著／岩波書店

短大の教員として学生指導に関わっている著者が、教育現場での悲喜こもごもを綴った1997年4月からの1年間の記録である。約10年前に出された書ではあるが、学生の姿は今もその当時も変わっていないように感じる。「学生が輝くときを見たい。輝く一瞬を見たい。」と、学生達と向かい合い、心をつかむ授業に全霊をかけ苦闘しながらも、学生の力を信じて温かく見守り、待ち、長く見続ける著者の姿には共感を覚える。

## 🌸🌸🌸:「京都文教大学の100冊」の選定と書評コンテストを実施 🌸🌸🌸:

昨年4月に京都文教大学FD委員会および図書館委員会において、本学学生が読むべき教養図書（文学、自然科学などの古典、専門分野への入門書など）として「京都文教大学の100冊」を選定することになりました。この100冊を選ぶに当たって、本学の学生が4年間にぜひ読んでほしい図書はなにかというアンケートを教職員に実施しました。このアンケートをもとに推薦の図書を集約し、両委員会の協議を経て、6月下旬に「京都文教大学の100冊」を選定しました。

そして、図書館の閲覧室に100冊のコーナーを設置し、ホームページ等で学生に広報しました。

さらに、この「京都文教大学の100冊」を学生のみなさんに浸透させ、読書をうながすために書評コンテストを実施しました。実施スケジュールは、7月24日書評募集告知、10月5日作品応募締切、10月10

日～10月25日作品公開と投票、指月祭で表彰することになりました。募集内容は、書評対象図書「京都文教大学の100冊」、字数500字で、オリジナル・未発表のものに限りしました。選考は、応募書評を書評委員会で選定し、ホームページで公開した上で京都文教大学の学生および教職員の投票により入賞作品を決定しました。表彰は、最優秀賞1点、佳作1点となりました。応募作品数は、6点で、投票の結果次のようになりました。最優秀賞は、臨床心理学科4回生 嶋田裕子さん、佳作は臨床心理学科4回生 森本美知子さんが選ばれました。表彰は、11月3日(土)、指月祭のメインステージで行われ、FD委員長の森谷寛之先生より、賞状、賞品がお二人に授与されました。

### 最優秀賞 『夜と霧』 V.E. フランクル著、池田香代子訳／みすず書房

臨床心理学科4回生 嶋田裕子

「心理学者、強制収容所を体験する」という原著の表題の通り、ユダヤ人精神分析学者がナチス強制収容所での日常をつづった本書は心理学的観点から静かに当時の事実を物語っている。フランクルの「偉大な英雄の苦悩や死を語るのではなく、おびたしい大衆の「小さな」犠牲や「小さな」死を語る。」という言葉通り、そこにはスリラー映画のような恐怖も、生々しい表現による描写もなく、ただ、静かに淡々と現実が書き記されているばかりである。だからこそ、なぜ強制収容所での強者は弱者に対して残酷な振る舞いができたのか、なぜ被収容者達は生きる選択をし、そしてしなかったのかを冷静に分析することができ、読者に感動を与え世界的ロングセラーとして読みつがれたのであろう。

原著の初版は1947年に、改訂版は1977年に出版されている。2冊を読み比べ、初版と改訂版でのフランクルの心境の変化を推察しても面白いのではないだろうか。

心理学的視点のみならず、文化人類学的視点や現代社会学的視点から読んでも十分に読み応えのある作品であり、「人間とは？生きる意味とは？」という素朴で根源的な疑問に対する答えを導き出す手がかりを与えてくれる一冊である。

### 佳作 『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』 選 洋子著／筑摩書房

臨床心理学科4回生 森本美知子

この本は学ぶことの喜びにあふれている。「その人が出した本について本人とゼミをする。こんな恵まれた環境はない。」彼女は知の集結する所はある種の桃源郷ではないかという。まったく同感である。だが学問はロマンチックなものではない、格闘技なのだ。研究者どうしの論争に、「勝敗を分けるプロの勝負を、生で味わえる環境に心から感謝」する。

しかし、いつまでも見ているだけというわけには行かない。1年でゼミ3年分の文献を読んでよけいに分からなくなったり、ゼミ発表の準備に身体に異常がでるほど苦しんだりしながら学問と格闘する。そして、学問に感動し、感動している自分に感動し、感動を創り出す上野千鶴子に感動する。現在学生である私は、以前にこの本を読んだ時以上に共感を覚える。熱狂的なタイガースファンの彼女は、論文を野球観戦のようにわくわくしながら読む。「苦痛は感動への序章、持続は感動への期待、集中は感動への執着」だという。

堅い本ではない。何度も声を上げて笑い、少しほろりとする感動本である。もちろん表題のケンカの仕方を始め、何を学んだか、何を学ぼうとしているかが具体的に書かれていて興味深い。



## 『余命1ヶ月の花嫁』を読んで

子ども未来コース 2回生 中 田 満里菜

ある日、本屋で売り上げランキングを見ているとこの本がランクインしていた。表紙にはうつむき加減の花嫁の写真。TBS「イブニング・ファイブ」で放送されたドキュメンタリーが書籍化されたものだった。私はタイトルと彼女の雰囲気惹かれ、この本を購入した。

彼女の名前は長島千恵さん。23歳の秋に突然乳がんに襲われた。取材が始められたのはがんが発見されてから1年4ヶ月後。彼女の乳がんは転移し、かなり重い状態になっていた。しかし、彼女はすごく柔らかな笑顔で写真に写っている。とても重いがん体に体がむしばまれているようには感じられない。だが、この状態になるまでに彼女は抗がん剤による治療を受け、吐き気や髪の毛が抜け落ちる副作用に耐え、左胸の手術を行っている。しかし、わずか半年で再発してしまい、胸骨と肺に転移してしまった。家族は余命1ヶ月と宣告される。家族や友人は彼女のために何をすべきか考え、結婚式を挙げさせてあげることにする。

私はこの本を読むまで「乳がんは40代・50代と年齢を重ねてから発症する可能性がある」「手術をすれば治る病気だ」と思っていた。しかし、実際は私たちと同年代の20代、30代前半で乳がんになる方も多い。「若年性乳がん」と称されるこの年代の乳がんは進行が非常に早いので、手術を行っても再発する可能性が高い。「治るがん」とは決して言い切れないのだ。千恵さんの場合も一度は手術をしたが、再発してしまった。

闘病の思いを同じ若い人に伝えたい。年配になってからの乳がんの情報はたくさんあるけれど、若い人の情報は皆無に等しい。若い人でもがんになる危険があるというのを知って欲しい。また、同じような年代の人ががん苦しんでいる人に自分一人で闘っているのではないと思ってほしい。そう思い彼女は取材を受けたと文中で述べている。

私たちは今こうして毎日健康に生活できている。しかし、いつ病気になるか予測することはできない。だが、つい「私には関係ない」と他人事に考えてしまうところが少なからずあるのではないだろうか。私は彼女がブログの中でつぶったこの言葉がすごく心に残った。

みなさんに明日がくることは奇跡です。

それを知っているだけで、日常は幸せなことだらけで溢れています。

この言葉を目にした瞬間、私は毎日来ることが当たり前だと思えず、1日1日を大切にしていなと感じた。「今日やらなくてもまた明日もあるし」とつい思ってしまう。他人が自分のためになにかをしてくれていても毎日してもらっていると当たり前前に感じてしまい、つい「ありがとう」と言うのを忘れてしまう。しかし、それは絶対に忘れてはいけないものなのではないだろうか。自分の気持ちを少し変えるだけで世の中はがらりと変わる。今まで生きてきた環境も周りにいる人たちもみんな同じなのに、たくさんの幸せを感じる事が出来る。私は千恵さんの生涯からこのことを学んだ。

彼女は最後まで笑顔忘れずに病氣と闘った。最後まで人を愛し、愛され、人を支え、支えられた24年の人生を生き抜いた。長くて先の見えない真っ暗なトンネルにいるような闘病生活を毎日必死に生きている千恵さんの姿を想像すると、自然に涙がこぼれた。自分の余命が1ヶ月だと知らなかったが、すごく内容の濃い1ヶ月を過ごした。私が彼女のように突然乳がんになり、抗がん剤で髪の毛は抜け、手術をして胸がなくなり、それでもまた再発してしまったら…絶対に彼女のように笑って生活することは出来ない。彼女の強い心と正面から病氣と闘っている姿に心を打たれた。

この本は、自分たちが日頃どれだけ無意識の間に幸せをたくさん得ているのか。いつ病気になってもおかしくないのだと気づかせてくれた。そして、病気になった時、周りにいる家族や友人など大切な人が自分にとってこんなにも大きな存在となって生きる力を生み出してくれるのだということも知った。

何度読んでも涙が溢れてくる本である。

みなさんも機会があればぜひ読んで欲しいと思う。

『余命1ヶ月の花嫁』

TBS「イブニング・ファイブ」編 (マガジンハウス)